

発刊の現代的意義

プルナ・B・カドカ

ネパールと日本はともによく似た歴史的背景をもっている。両国とも文化の保存者として、他の多くの地域ですすでに失われてしまった文明の精華を保持し続けている。ネパールは山、日本は海といった地理的な防壁に守られて、長い間人類の共通遺産を守り育んできたのである。新たな世紀を迎えんとする今、現代の抱えるさまざまな課題に取り組むことが要請されているが、世界各国の国民は東洋の英知に目覚めるべきである。物質的富の過剰な追求ではなく、精神性への回帰が求められるのである。この意味で、青年スポーツ文化省所管のネパール

国立公文書館所蔵の『梵文法華経写本』(No. 421)の〈写真版〉と〈ローマ字版〉を出版するプロジェクトは、きわめて重要である。この写本の本文はサンスクリットの内容をブラーフミー文字の一種で表記している。『法華経』は大乗仏典の九種の聖典の一つとされている。『法華経』は仏教のメッセージを次のように説く。「一切の衆生が仏と等しい境涯にまで人格を高めることのできる可能性をもつ」と。

一九九七年十一月、東洋哲学研究所はネパール国立公文書館所蔵の法華経写本の調査・研究と高品位の精密な

写真を撮影するため、徳島大学教授戸田宏文氏と、カメラマンの松岡承一氏を同公文書館に派遣された。写本（No. 421）の〈写真版〉と〈ローマ字版〉（上巻）が一九九八年十一月と一九九九年にそれぞれ出版されるとの知らせを受けたが、実にうれしいかぎりである。

一九六二年に東洋哲学研究所を創立され、その『法華経』プロジェクトに精神的支援を与えてこられた創価学会インタナショナル（SGI）会長池田大作氏、並びに「法華経写本シリーズ」の一環としてこれらの出版物を刊行される創価学会会長秋谷榮之助氏に対し、衷心よりの感謝を申しあげたい。また代表理事森田康夫氏、所長川田洋一氏の下、東洋哲学研究所が、すばらしい技術で完璧な写真を撮影された松岡承一氏は当然のこととして、多くの人々を協同させ、今回の出版を実現させたことに対して敬意を表したい。また、サンスクリットの原典をローマ字に忍耐強く転写してくださった戸田教授にもお祝いのご挨拶を申し述べたい。その献身的な努力によってこの『法華経写本』も一般の読めるところとなるのである。これらの出版物が写本の保存と宣揚に資す

るのみならず、仏教や文献学をはじめ、さまざまな分野の研究に役立つことを望むものである。今回の出版がネパールと日本の国民の間の温かく友好的な関係の結果として実現したこと、またその友好関係の一つの象徴となったことを喜ぶものである。

一九九八年六月六日

（プルナ・B・カドカ／ネパール王国青年スポーツ文化大臣）

（本稿は一九九八年十一月十八日に出版された『ネパール国立公文書館所蔵梵文法華経写本』〈写真版〉の「巻頭言」を転載したものです。）